「ジャップ・ロード」改名論争にみる現代アメリカの多文化主義

佃　　陽　子

はじめに

2017 年 8 月、ヴァージニア州シャーロッツビルで行われた白人至上主義者らによる集会で、人種的過激思想に反対する人々との衝突がエスカレートし、1 名が命を奪われた事件は、その生々しい映像とともに全世界に衝撃を与えた。死亡した女性は人種差別に反対する立場から抗議活動に参加し、白人至上主義者の若者が意図的に暴走させた車に巻き込まれた。トランプ大統領がこの事件に関して白人至上主義者を明白に非難せず、騒動を引き起こした双方に責任があるとコメントしたことで、白人至上主義を容認している、と激しい批判を受ける事態となった。シャーロッツビルの事件は、これまでリベラルな多文化主義のもと抑制されてきたアメリカの排外主義や白人至上主義が、差別的な言動を繰り返してきたトランプ大統領の誕生によって、活発化してきたのではないかという危惧を生み出している。

シャーロッツビルの事件の発端となったのは、市の公園に建てられた、150 年以上前の南北戦争で南部連合を率いたロバート・リー将軍の銅像である。白人至上主義者らの集会の目的は、リー将軍の記念碑撤去に反対することであった。南部連合の指導者や兵士を顕彰した記念碑、名前を冠した学校や地名、軍事基地の名称、祝日は、南部諸州を中心に、2016 年 4 月時点で少なくとも 1500 件あったとされているが、近年これら記念碑の撤去や改名などが急増している[1]。そのきっかけとなったのが、2015 年、サウスカロライナ州チャールストンの黒人教会で、白人至上主義者の若者が銃を乱射し、牧師を含む 9 名ものアフリカ系アメ

リカ人を殺害した事件である。犯人が自身のウェブサイトで、犯行予告ともとれる「人種戦争」の開始を訴え、南軍旗と銃を持った自身の写真を掲載していたことが後に判明すると、南北戦争のシンボルと白人至上主義の結びつきが全米で強く懸念されるようになった[2]。そのような中、シャーロッツビル市議会は2017年2月にリー将軍銅像の撤去を決定した。同年6月には、公園の名称も「リー公園（Lee Park）」から、奴隷解放を意味する「エマンシペイション（Emancipation）」にちなんで、「エマンシペイション公園（Emancipation Park）」に改名された。しかし、このような記念碑の撤去は歴史を消去することだと主張し、撤去や改名に反対する人々も多く、南部各地では激しい論争となっていた[3]。

シャーロッツビルで注目を浴びた南北戦争の記念碑をめぐる問題は、今日のアメリカ社会の分裂の激しさを示している。事件から二日後、反人種差別の立場から事件に抗議する人々が、ノースカロライナ州ダーラムで南軍兵士の銅像を引き倒し、7名が逮捕された。トランプ大統領がツイッターでこれを非難して、「美しい銅像や記念碑が撤去されて、我が国の歴史や文化が引き裂かれるのは悲しい」と述べたことから、南北戦争をどのように記憶／顕彰するかという問題は、ますます政治性を帯びてきている。今回の悲劇を引き起こした白人至上主義者に対する激しい非難は、南部連合の記念碑撤去に反対する人々すべてを白人至上主義者であると決めつけかねない。たしかに、奴隷制の明白な非人道性が広く認識されている現代の世界において、奴隷制を擁護した南部連合を讃えることは人種差別主義者であると疑われかねないことである。しかし、南部連合の記念碑撤去に反対する者は人種差別主義者であり、賛成する者はそうではない、という二項対立的な議論には危うさがある。シャーロッツビルのような個別の事例に関して一個人がどの程度知っているか、関連があるかにかかわらず、記念碑の是非をめぐる問題自体が、人種差別主義者か否かの踏み絵になりかねないからである。これまで記念碑撤去に反対してきた人々は、シャーロッツビルの事件後、反対の声を上げにくくなった[4]。白人至上主義およびあらゆる人種差別は非難され

るべき当然の不正義である。しかし、人種差別主義者か否かの踏み絵を、様々な場面においてせまる現代アメリカ社会の人種主義自体もまた危惧すべきではないのだろうか。それは南部特有の問題ではなく、多文化主義以後のアメリカ社会全体に共通する問題である。

本稿は、人種差別的との理由で2004年に改名された、テキサス州東部ジェファーソン郡の道、ジャップ・ロード（Jap Road）の事例を通して、現代アメリカ社会の多文化主義について考察するものである。ジャップ・ロードの事例は、近年の南北連合の記念碑をめぐる論争と直接関係するわけではないし、南北戦争の記憶をめぐる問題と日本人・日系人に対する蔑称に関する問題では、歴史的な背景など様々な点で性質が異なる。しかし、ジャップ・ロードの改名に異を唱えた地元住民がその根拠としたのは、南部連合の記念碑撤去に反対する人々と同様に、歴史の喪失であった。また、反対を表明する中で、住民たちは人種差別主義者ではないと証明することを強いられた。公民権団体や活動家たちがメインストリームのメディアに訴えて人種差別是正を指摘する一方、住民たちが地域における歴史の保存を主張するという構図は、南部連合の記念碑をめぐる論争にも共通する。

本稿の目的は、地元住民や改名を目指した活動家の声に丁寧に耳をかたむけながら、1992年と2003年に起こったジャップ・ロードの改名論争をできるだけ詳細に記述することである。当時の地方紙および公民権団体機関誌の読者欄に寄せられた投書やその他の記事、また、2008年に行った聞き取り調査をもとに、論争の経緯を詳述する。本稿では、まず20世紀初頭にさかのぼるジャップ・ロードの起源について触れ、失敗に終わった1990年代の改名運動、そして改名を達成した10年後の運動の経緯を複数の視点から時系列で追い、改名が地域にもたらした影響について述べる[5]。ジャップ・ロード改名論争を通して、現代アメリカ社会における多文化主義を浮かび上がらせ、今日南部各地が直面している南部連合の記念碑をめぐる問題を、別の側面から考察する一助としたい。

1. ジャップ・ロードの起源

テキサス州東部のジェファーソン郡ファネットという人口2千人ほどの町に、2004年まで存在した4マイル（約6.4キロメートル）ほどの「ジャップ・ロード」の由来は、1905年に真弓吉雄という三重県出身の実業家が始めた米作農場「ジャップ・ファーム」である（図1, 2）[6]。真弓は20世紀初頭にテキサス南東部でいっせいに米作事業を始めた、日本人投資家・実業家たちの一人である。1902年に同地を訪れた内田定槌ニューヨーク総領事が、州知事や地元有力者に請われて、テキサスでの米作事業の誘致を日本人に向けて呼び掛けたところ、多数の人々が応じ、1908年までに日本人がテキサスで開始した米作事業は30件を超えた[7]。こうした日本人起業家には、元衆議院議員で同志社社長をつとめたことのある西原清東、時事新報記者の大西理平、後の三共製薬となる三共商店の共同出資者でもあった貿易商の西村庄太郎、男爵の九鬼一造、岡山県の銀行頭取であった片山広斗、社会主義者の片山潜などが含まれ、当時の日本で比較的高い社会的地位を持つエリート層が多数を占めていた[8]。真弓吉雄もまた、三重県に広大な土地を所有する資産家の長男として生まれ、多額納税者として貴族院議員の候補者となるほどであった[9]。慶應義塾で福沢諭吉の薫陶を受け、若いころから海外雄飛を志していた真弓は、テキサスでの米作事業に投資するために渡米した[10]。

内田総領事の誘致以降、テキサスの米作事業は日本で一種のブームとなり、大多数の日本人移民労働者とは異なるエリート層を引き付けた。出稼ぎ労働を目的とした日本人のアメリカへの移民は、1885年に日本政府によるハワイへの官約移民から始まった。1894年以降は移民会社と呼ばれた私企業の斡旋によって労働契約を結んだ「契約移民」が多数を占め、契約労働者のアメリカ入国が禁止されて以降は契約のない「自由移民」となって、20世紀に入り毎年一万人を超える日本人がアメリカ本土へ入国していた。しかし、日本人移民が集中した西海岸では1890年代から日本人労働者に対する排斥が徐々に顕著になり、日本政府は1900

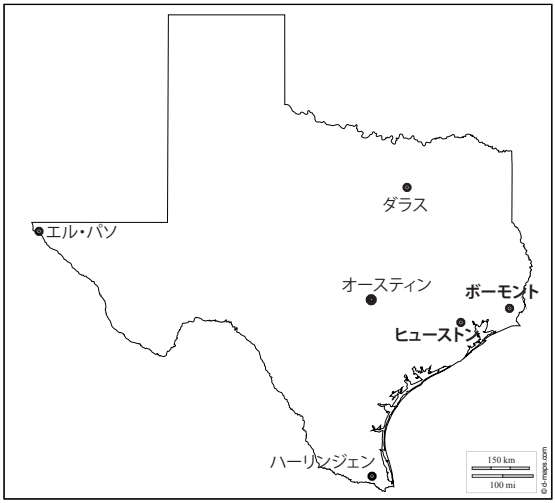

図 1　テキサス州地図
（d-maps.com を利用の上、筆者作成）

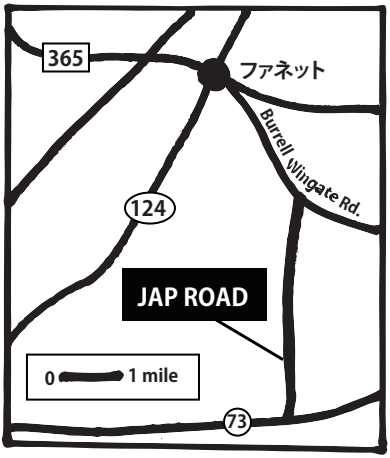

図 2 ジャップ・ロード周辺地図（筆者作成）

年にアメリカ本土への日本人労働者の旅券発給を一時停止するなど、日本人のアメリカ入国には慎重になっていた。そのような中、日本政府は、テキサスでの米作事業のために渡米する日本人に対しては、通常の労働を目的とした「移民」とは異なる、「定住農夫（settled agriculturalists）」という特別なステータスで旅券を発行した。排日運動の激化に悩む在米日本公使・領事らにとって、南部テキサス州の日本人米作者誘致計画は、アメリカで日本人の評判を上げる好機と感じられたであろう。外務省官僚は、起業家たちに優先的に旅券を発給するよう計らった。各起業家らはテキサスでの事業開始にあたり、自分の家族や親戚に加え、郷里の人々を「農業組合員」として、集団で渡米した[11]。テキサスでの米作事業は日本の移民関連雑誌だけでなく、経済雑誌や新聞などに取り上げられ、先駆者たちは有望な事業であることを喧伝した[12]。当時、農科大学生の流行歌に「駒場を出でて二十年／今じゃテキサス大地主／秋に小鹿が鳴く頃は／黄金の波が九万町」とあったように、大学卒業後にテキサス米作で成功することは青年の憧れにもなった。1906 年に島崎藤村が出版した小説『破戒』の結末では、日本の部落差別に絶望した主人公が農業をするためテキサスに向かったことからも、テキサス米作が日本社会で注目を集めていたことがわかる[13]。

日本人米作業者の誘致によって、1900 年にはたった 13 人だったテキサス州の日本人人口は、1910 年には 340 人に増加した[14]。排日の激しい西海岸とは異なり、テキサスの人々は日本人を歓迎した。日本人起業家は鉄道会社関係者や地元の地主から米作のための土地を購入、もしくはリース契約を結んだ。その中でも日本人米作者が特に集中したのが、テキサス南東部に位置し、現在アメリカ第 4 位の人口を誇る大都市ヒューストンの近郊、ウェブスター周辺である。すでに農業灌漑設備が整理されており、南太平洋鉄道による輸送にも便利な地域であった。日本人による米作事業がピークを迎えた 1908 年には、日本人の米耕地は合わせて 12,000 エーカーにおよび、収益は 25 万ドルにのぼった。日本人の米耕作地は州全体からみればわずかなものだったが、1900 年からの 10 年

間で州の米生産量は35倍に増加し、このころテキサスは一大コメ生産地に成長した[15]。

ファネットにある真弓吉雄の米作農場は、日本人米作地が集中したウェブスターからは離れた地域にあり、ヒューストンから約70マイル東に位置し、現在人口11万人ほどの最寄りの都市ボーモントからは約20マイル離れている。ファネットの町は1890年代に地主B・J・ファネットが近郊を走る鉄道のために開いた商店を中心とするコミュニティから生まれ、真弓が米作を開始する前から大規模な米作が行われており、農業用灌漑設備が整えられていた[16]。1905年の三度目の土地視察で、真弓は井戸やポンプ、住居用家屋も含めた1,734エーカーの土地を3万5千ドルで購入した。それは彼が郷里で所有する約10倍もの広さであり、テキサスの日本人農業者のなかでも3番目の大きさだった。妻や子供を郷里に残し、真弓は弟の康雄と使用人の松岡に加え、10名ほどの労働者を郷里から組合農夫として呼び寄せた。吉雄は農場の経営をほぼ康雄に任せており、テキサスと日本を毎年のように行き来していた[17]。真弓農場は1908年の最初の作付けで米約680トンの収穫を上げ、その収益は2万7千ドルにのぼり、事業は順調に進むかにみえた[18]。しかし、その後は冷害やハリケーンによる不作が続き、農業経営は暗礁に乗り上げた。米の価格も安定せず、米国内の需要もさほど伸びなかった。呼び寄せた組合農夫たちの中には、より賃金の高い日本人農場やカリフォルニアに逃走してしまう者もおり、労働者不足にも悩まされた。結局、1915年に吉雄はすべてを弟康雄に託して帰国し、康雄も1924年に全土地を売却して引き上げ、真弓農場は20年たらずで閉鎖された[19]。

テキサスの日本人米作地のほとんどが、真弓農場と同じような末路をたどった。1920年頃になると日本人の米作地は、西原清東の農場のほかはごくわずかしかなかった[20]。ほとんどの起業家は土地を売却、あるいは組合農夫に託して帰国したが、西原は米作を続け、テキサスに残った数少ない日本人の一人である。西原は米のほかにサツマ＝オレンジとよばれた温州蜜柑の苗木業を経営し、アラバマ州やニューメキシコ州にも

支店を設けた。1918 年には息子夫婦にテキサスの農場を託し、一転ブラジルで農業に取り組んだ。1932 年には 33 年ぶりに日本へ一時帰国し、台湾で 4 年間米作事業に関わったのち、1937 年にテキサスの家族のもとへ戻ってから 2 年後にその生涯を閉じた[21]。西原農場の地域経済に対する貢献はテキサス州で広く知られており、その子孫は今もウェブスターに住んでいる。また、新潟出身で石油事業を営んでいた岸吉松もテキサスに残留した日本人米作者だが、岸は米作事業には早々に見切りをつけ、後にテキサスで油田が発見されて石油発掘ブームになると石油事業を始めた。

真弓が帰国して農場が閉鎖された後も、人々がその農場を「ジャップ・ファーム」と呼んでいたことから、「ジャップ」は地名の一部として残された。いつ頃正式に名づけられたのかは不明だが、ジェファーソン郡が近辺の道路や橋修繕のための予算を決議した 1929 年の文書には、「ジャップ・ロード」に加えて、その近辺の橋が「ジャップ・ブリッジ（Jap Bridge）」と記載されていることから、その時期すでに公式な名称となっていたようである[22]。真弓の農場の近辺を走る道を「ジャップ・ロード」と名づけたのは、真弓から農場を購入したバレル（Burrell）氏およびウィンゲート（Wingate）氏とされている[23]。今もこの地域には両家の子孫が住み、その両家族が由来となったバレル・ウィンゲート・ロード（Burrell Wingate Road）はジャップ・ロードと交差している。

さらに重要なことは、「ジャップ・ロード」は真弓兄弟の地域経済に対する貢献を讃えて命名されたものであると、地域の住民が数世代に渡って認識してきたという点である。ファネットの地方史家として知られるグウェンドリン・ウィンゲートは、真弓兄弟が近隣住民と良好な関係を築いていたと伝えている[24]。真弓農場に立ち寄った人々はいつでも冷たい飲み物でもてなされ、住民が町に出かける際には、ファネットで唯一の車を所有していた真弓を頼りにしていた。真弓が農場内に建てたホールでダンスパーティーが開催され、近隣の住民が招かれたこともあった。弟の康雄が帰国する際、住民は陶器類を譲り受け、長い間それ

を大切に保管していた。農場は閉鎖され、住居やホールも解体されたが、その材木の一部は再利用されて新しい住居に生まれ変わった。住民の中には、今でも真弓の住居の一部が自分の家屋に引き継がれていることを誇りとし、その公式な認定を求める者もいる。ファネットの住民にとって「ジャップ・ロード」は、過去を懐古するロマンチックな記憶の一部なのである。

また、テキサスにおいて、地域や道の名前で顕彰されている日本人米作者は真弓だけではない。例えば、ヒューストンの「マイカワ・ロード（Mykawa Road）」または地名の「マイカワ（Mykawa）」は、真弓と同じ頃同地で米作をしていた前川真平に由来する。真弓がテキサスに土地を視察する際に同行したこともある前川は、農作業中の不幸な事故で命を落とした。前川の事業の仲介役を務めた、鉄道会社の入植代理業者ギャレット・ドビンがその死を悼んで、近隣の鉄道の駅を「マイカワ」と命名したのが、道と地名の由来である[25]。また、ウェブスターにある「コバヤシ・ロード（Kobayashi Road）」は、西原農場の組合農夫として渡米し、テキサスに永住した小林光太郎に由来する[26]。オレンジ郡のヴィドーにある道、「ジャップ・レーン（Jap Lane）」は岸吉松の米作地に由来する。前川や小林とは異なり、真弓に対する顕彰が「マユミ・ロード」ではなく、「ジャップ・ロード」になったのは、地域住民が「マユミ（Mayumi）」という名前を発音しにくかったためだと言われている[27]。ファネットの住民は、真弓が自身のことを「ジャップ・ファームのジャップ」と呼んでいたと記憶している[28]。また、日本人が集中したウェブスターとは異なり、ファネット周辺には真弓以外に米作を営む日本人はいなかったことから、名前を呼んで他の日本人と区別する必要もなかったと思われる。

しかし、現代社会において「ジャップ」はアメリカを含めて世界的に、日本人および日系人に対する蔑称であると認識されている。「ジャップ」の蔑称は、第二次世界大戦で日本がアメリカの敵国となった時には憎悪を込めて頻繁に用いられ、特に、日系アメリカ人にとっては、戦時中、

西海岸に住む日本人・日系人すべてを強制的に立ち退かせて内陸部に収容した、人種差別に満ちた不正義の歴史を思い起こさせる。

真弓吉雄の「ジャップ・ファーム」と、その遺産としての「ジャップ・ロード」における「ジャップ」は、その当時差別的な意味を持っていたのだろうか。日米間の交流が始まった19世紀後半のアメリカの様々な文書では、「ジャップ（Jap）」は「ジャパニーズ（Japanese）」の省略形としてしばしば使用されていた[29]。例えば、1880年代以降多くの欧米の子供たちに親しまれた日本人形は「ジャップ・ドール（Jap Doll）」と呼ばれていた[30]。また、20世紀初めにアメリカに輸入された日本米は一般的に「ジャップ・ライス」と呼ばれており、この品種はテキサスの日本人も生産していた[31]。だが、「ジャップ」が略称に過ぎないとしても、当時のアメリカ社会において、日本人を含めた東洋人に対する差別的感情がなかったわけではなく、「ジャップ」が侮蔑的な意味で使用されることも十分認識されていた。

当時の日本人渡米者も、アメリカで「ジャップ」が差別的な意味で使用されることを理解していた。例えば、真弓がテキサスで米作を開始した1905年の渡米関連雑誌は、排日感情の強かった西海岸で日本人移民が「ゴーデンジャップ」（God Damn Jap、ジャップの畜生め）と罵られたと伝え、警戒を呼び掛けている[32]。1924年の移民法によりアメリカ政府が日本人移民の入国を停止し、これに対して日本社会でも反米感情が高まった頃までには、「ジャップ」が日本人に対する蔑称だということは、日本の知識人の間ではっきり認識されていたようである。1906年に1年間ニューヨークに留学したことのある詩人の高村光太郎は、1924年頃に書いたと思われる詩で、滞米時を回想し、自らを「憤るジャップ」とあえて皮肉を交えて呼び、アメリカ社会に対する怒りや憤りを表現した[33]。また、1907年から13年間アメリカに滞在した、社会主義者で文芸評論家の前田河広一郎も、1924年に出版された評論「俗語『ジャップ』」において、「ジャップ」を「場合によっては、世界の知識階級連盟に訴へて公開的な堂々たる抗議文をも書き得べきほどの刺戟のはげし

い、危険な一つの俗語」と述べている[34]。真弓吉雄がテキサスでの経験について記した資料は残されていないが、当時の日本社会でエリートの一人であった真弓が「ジャップ」の侮蔑的な意味合いを知らなかったとは考えにくい。

米作事業に失敗して帰国した真弓吉雄は、後年テキサスでの経験について語ることはあまりなかったようである。事業の支援者でもあった父親を亡くし、帰国後しばらくは社会に出ることなく引きこもりがちであったが、やがて知人のすすめで三重農工銀行の監査役に就き、1923年に三重県海外協会を発足させ、ブラジルへ移民する三重県人を支援する役割を担った。三重県海外協会の理事として、その会報に寄せた真弓の記述をみると、彼はテキサスでの挫折を、次世代によるブラジルへの移民事業に託したようである[35]。第二次大戦中、移民送出事業は停止したが、真弓は、戦後に再発足した三重県海外移民協会の顧問を務め、1960年に86歳で他界した[36]。自らのテキサス農場跡地が「ジャップ・ロード」と呼ばれていることを、真弓が知っていたかどうかは不明である。しかし、その「ジャップ・ロード」は真弓兄弟の帰国から70年あまりを経て、負の遺産として「発見」され、小さな町ファネットを大きく揺り動かすことになった。

2．ジャップ・ロード改名論争（1992 ～ 1993年）

2-1 ジャップ・ロード問題の「発見」

1992年、ファネットの「ジャップ・ロード」を人種差別的な「問題」として初めて指摘したのは、日系アメリカ人三世で小学校教師のサンドラ・タナマチだった。本節では、改名には至らなかった最初の改名論争の詳細を時系列に記述する。タナマチは、メキシコ国境に接したテキサスの最南端に位置する、リオグランデ・ヴァレーの町、ハーリンジェンで生まれ育った生粋のテキサス人である[37]。リオグランデ・ヴァレーは、鉄道が開通した20世紀初頭から農業地帯として開拓が進み、カリ

フォルニアの排斥に嫌気がさした日本人農業者らを引きつけ、1917年には共同出資による砂糖黍農園「ヤマト・コロニー」の試みもあり、小さな日系コミュニティが形成された[38]。戦中テキサス州は日系人の強制立ち退き・収容の対象にはならなかったが、強制収容所を退出後、すぐにカリフォルニアへ帰還することが許されなかった多くの日系人を受け入れた。また、戦後に日本人戦争花嫁の増加もあり、リオグランデ・ヴァレーは1960年代まではテキサス最大の日系人口を抱えた[39]。タナマチの父方の祖父、棚町熊蔵は福岡県出身で、カリフォルニアで農業を営んだ後、妻とアメリカ生まれの5人の子供とともに、テキサス州テリーにある岸吉松の米作農場で働いた[40]。棚町一家は、テキサス南東部を転々とした後に、1933年にリオグランデ・ヴァレーに落ち着いた。タナマチの母はカリフォルニアのターミナル島で生まれ育ち、そこには最初に強制立ち退きの対象になった日系コミュニティがあった。タナマチの叔父三人はアメリカ兵士として従軍し、そのうち一人はヨーロッパの戦場で命を落としている[41]。終戦直後の1945年9月にリオグランデ・ヴァレーで生まれたサンドラ・タナマチは、戦争が日系人全体に与えた影響力の大きさを身近で聞いて育った。そんな彼女にとって、「ジャップ」は明らかに日系人に対する蔑称であった。

夫の転勤を機に、1989年にボーモントに引っ越して間もなく、タナマチはファネットにある「ジャップ・ロード」の存在を知り、大きなショックを受けた。タナマチが最初にジャップ・ロードのことを知ったきっかけは、地元で人気だったナマズ料理の店「ブーンドックス」の広告である。そのレストランは、雑誌などに広告を掲載していただけでなく、主要道路に看板を立て、テレビやラジオのコマーシャルも放送していたため、その住所である「ジャップ・ロード」はボーモント近隣では目につきやすく、電波に乗って各家庭の耳にも入ってきた[42]。「ジャップ」という言葉は、テキサスで日系人として生きてきたタナマチの個人的な過去の苦い経験だけでなく、日系人全体に対する人種差別や偏見を想起させるものであった。そのレストランの広告に接するたびに、タナ

マチは蔑称を浴びせられているような気分になり、ジャップ・ロード近辺の地域は彼女にとって恐怖そのものになった。

ジャップ・ロードを「発見」してから、タナマチは道の改名を求める声を上げ始めた。彼女を動かした契機の一つに、1992 年の冬季オリンピックを視聴していた時のエピソードがある。

> 私は全米の日系アメリカ人の仲間とともに、フィギュアスケートでクリスティ・ヤマグチが金メダルを獲得したのを祝福していました。国歌が流れる中、表彰台の最上段にクリスティ・ヤマグチが立つのを見て喜んだ後にスポットコマーシャルとなりました。ブーンドックス・レストランのコマーシャルが流れ、「ジャップ・ロード」の文字がテレビの画面一杯に映し出され、音声でも「ジャップ・ロードを行くと・・・」とレストランの場所が大きくアナウンスされました。これではっきりしました。日本から受け継いだものを大いに誇りに思っている一人のアメリカ人として、私はジャップ・ロードの名称変更に取り組むことを決意したのです[43]。

日系人のヤマグチが祖国アメリカにオリンピックの金メダルをもたらした、日系人にとって誇らしいこの瞬間にも、なぜいまだに「ジャップ・ロード」という人種差別的な名前の道がテキサスに残っているのか。爆発的な怒りがタナマチの胸にこみ上げた。レストランの CM が喧伝した「ジャップ・ロード」は、ヤマグチの偉業に対する彼女の感動を台無しにし、日系アメリカ人としての自尊心を傷つけた。日系アメリカ人金メダリストヤマグチと「ジャップ・ロード」のイメージは偶然の重なりであるものの、タナマチはその皮肉を見過ごすことができなかった。

タナマチは息子と一緒にレストラン「ブーンドックス」に出かけてみたこともあった。当時「ブーンドックス」は郷土料理でもあるナマズ料理の有名店であり、タナマチも同僚にすすめられていた[44]。当時の広告に、「ナマズ料理が大好きな人や、ちょっと変わったものが好きな人に

は天国のような場所で、アライグマやワニに餌付けができる」とあるように、子供向けのイベントも楽しめるレストランであった[45]。また別の広告には、客は「ゆったりとした田舎の雰囲気」で、テイラー河の美しい眺めを楽しむことができるともある[46]。しかし、「ジャップ」ロードにあるレストラン「ブーンドックス」は、タナマチとその家族にとって決して愉快な場所ではなかった。レストランに到着すると、自分たち日系人にとって、侮蔑的な名前の道にある店に行くのは嫌だ、とタナマチの息子は入店を拒んだ[47]。息子の激しい拒絶を目にしたタナマチは、ジャップ・ロード改名のために行動を起こす決意をした。

もともとタナマチは、自分一人で改名のための行動を起こすとは夢にも思っていなかった。トラブルになるのを避けるため、彼女がまず助けを求めたのは、日系アメリカ人の公民権組織、日系市民協会（Japanese American Citizens League, 以下 JACL）である。彼女自身 JACL の活動に積極的に関わっていたわけではなかったが、両親は長い間地方支部の会員だった。JACL はアジア系アメリカ人団体の中で最も古くからある公民権組織であり、戦時中の日系人強制収容に対する補償運動でも重要な役割を果たしてきた、全米にネットワークを持つ組織である。補償が達成された後も日系アメリカ人をはじめとする人種的マイノリティの権利を守る組織として、様々な活動を続けている。タナマチはヒューストン支部にジャップ・ロードの改名を訴える手紙を書いた。しかし、ヒューストン支部からも本部からも反応はなく、何も起こらなかった。

JACL の支援もないまま、タナマチは一人で、ボーモント市長やテキサス州知事などの地域の公職者へ改名を訴える手紙を送り始めた。そのうちに彼女はジャップ・ロードの問題は、1 名の判事と 4 名の郡議員からなるジェファーソン郡議会の管轄であると知る[48]。ファネットを管轄する郡議員、マーク・ドミングは、ジャップ・ロードの住民を招いて、この問題に関する公聴会を開催することをタナマチに約束した。

2-2 地元住民の反応

1992 年 9 月 15 日、地元の主要紙『ボーモント・エンタープライズ』に、ジャップ・ロードの改名を求めるタナマチの運動が初めて報道され、地元で激しい論争を巻き起こした[49]。記事はジャップ・ロードの由来とともに、その名前の「不快な（offensive）」性質に対するタナマチの懸念をつづった。また、戦時中に強制収容された彼女の母親や、第二次世界大戦でアメリカ人として従軍した叔父の話を含め、タナマチ一家とテキサスの結びつきについても言及した。タナマチが、彼女の教える小学校 2 年生の子供たちとジャップ・ロードの問題を共有し、人種差別の問題を教室で議論していることも説明した。記事の末尾にあるドミング郡議員のコメントでは、この問題についての公聴会が開催される予定であることと、「単純にジャパニーズ・ロードに名前を変えたほうがいいのではないかと思っている」という彼の個人的な見解が示された。

記事には、ジャップ・ロードとバレル・ウィンゲート・ロードの交差点の道路標識の下に立つタナマチを写した大きな写真が含まれているが、この写真はこの問題における複雑な側面を象徴している。写真の中の彼女は腕を組み、険しい表情で「JAP RD」と書かれた標識を見上げている。「JAP RD」のすぐ下には一旦停止を示す「STOP」の交通標識があり、ジャップ・ロードの存続にストップをかけるべきであるという、タナマチの主張を象徴的にあらわしている。日系三世である彼女の東アジア人らしい容貌は、典型的なテキサス人像を思い起こさせるものではない。しかし、彼女が身に着けているピンストライプのブラウスには、テキサス州旗のシンボルであるローンスターのアップリケがほどこされており、それは、彼女が決して外国人でなく、生粋のテキサス人であり、アメリカ人であることを静かに主張しているかのようである。

この記事は、ジャップ・ロード住民のみならず、ファネットやボーモント、さらに近隣地域の住民から多くの反響を呼んだ。これ以降、問題が沈静化する翌年 8 月まで、エンタープライズ紙は、ジャップ・ロードに関する投書を読者欄に少なくとも 25 件掲載した。むろんすべての投

書を掲載することは不可能であろうから、これ以上の数の読者の意見が同紙に寄せられたと思われる。タナマチと地元住民は、主に同紙の読者欄で激しい議論を交わし、近隣の小規模の地方紙上でも同様の議論が見られた。現代ならばこうした現象は、インターネット上に掲載された記事のコメント欄などで展開されるのが一般的だが、インターネットがほとんど普及していなかった当時は新聞の読者欄が議論の場を提供した。また、インターネットであれば特別な場合を除いて、読者間すなわちユーザー間の議論がウェブサイト管理者に制限されることはない。それとは異なり、読者欄を通じた紙上での議論は、新聞の編集者によって選別や編集などコントロールされる。そして、エンタープライズ紙は、読者欄とは別に、ジャップ・ロード論争の推移を報じ続けた。

地元住民のほとんどは、改名に強い反対を表明した。その理由は、過去に住んでいた日本人米作者の真弓への感謝のしるしこそが、道の名前の由来であり、名前自体に侮蔑的な意味は一切ないというものであった。また、現実的な理由から改名に反対する者もいた。日本とは違って、道の名前が住所の一部として重要な役割を果たしているアメリカでは、道の名称変更は住所表記の変更を意味する。警察や救急、郵便を含むすべての公共サービスに住所変更を届け出て、親戚や友人にも変更を伝えるのは、はっきり言って面倒だという意見もあった。しかし、やはり反対者が最も強調したのが、道の名前そのものに人種差別的な意図は元々ないし、今もそれは感じられないという点であった。住民は日本人米作者の遺産と地域の歴史に対する純粋な愛着を繰り替えし訴えた。

改名反対の意見表明は、住民のタナマチ個人に対する怒りとなってあらわれた。真弓を直接知る曾祖父母や祖父母から、日本人農場のエピソードを聞いて育ってきた古参者たちは、ジャップ・ロードという名前に問題があると思ったことは一度もなかった。彼らは、近隣住民だけでなく、真弓兄弟も自分たちのことを「ファネットのジャップ」や「ジャップ・ロードのジャップ」と呼んではばからなかったと主張し、ジャップ・ロード存続の根拠を正当化した。住民からすれば、タナマチは「地

元に伝わる華やかな歴史を、人種差別で塗り固めておとしめようとしている」部外者であった[50]。タナマチが教室で「6、7歳の無垢な幼い子供たちに偏見を教えている」と批判する声もあった[51]。

タナマチに対する怒りと反発は、一部の人々に第二次大戦の対日戦争の記憶と日本人に対する憎悪を呼び覚ました。ある古参者は、タナマチの問題提起を真珠湾攻撃の歴史になぞらえて、コミュニティへの「奇襲攻撃」と呼び、激しく非難した。またある投書は日本人への憎悪に満ちていた。

> 哀れなサンドラ・［タナマチ］ナカタ[52]。ジャップ・ロードという名前が気に食わないんだとさ。彼女の国の奴らがやった真珠湾攻撃で、愛する家族を失った人たちはこれを聞いたらいったいどう思うだろう。みんなわかっちゃいないみたいだけど、日本はアメリカを攻撃したんだ。やつらは俺たちを征服したかったんだ[53]。

この投書が明白に示すのは、タナマチのようにアメリカで生まれ育った日系アメリカ人と、日本で生まれ育った日本人が区別されていないという点である。また、他の住民は第二次大戦中の日本軍の戦争犯罪に言及し、新しい名前は、原爆を意味する「A-Bomb Road」にしてはどうかとさえ提案している[54]。当時のアメリカ社会では、日米貿易摩擦問題に端を発したジャパン・バッシングの影響が残っていて、一般のアメリカ人が日本人に対して怒りを表明するのは比較的よくあることでもあった。

また、「ジャップ」という言葉は、日本人に対する蔑称なのか否かという観点から、道の名前としての適切さを真剣に問う声もあった。英国からボーモントに移住したある夫婦は、もし自宅の前の道が「ライミー・ロード（Limey Road）」と名付けられたら誇りに思うだろうと述べている[55]。また、あるボーモント市民は、最近ルイジアナ南部に向かう道中で「デイゴ・ロード（Dago Road）」を見つけたと投書した[56]。ライミー（Limey）は英国人に対する、デイゴ（Dago）はイタリア人に対する蔑

称である。これらの読者は、たとえジャップという言葉自体が侮蔑的だとしても、特定の民族を道の名前で顕彰することは、その民族にとって名誉ではないかという考えにもとづいている。またある者は、「テックス（Tex）」がテキサス人を指す「テキサンズ（Texans）」の略称であるように、「ジャップ」も「ジャパニーズ」の略称にすぎないと主張した上で、「ジャップ」が侮蔑的なら「テックス」もそうなのかと問いかけている[57]。新名称もいくつか提案され、「ジャパン・ロード」や「ジャパニーズ・ロード」のほかに、日系アメリカ人先駆者を意味する「ジャパニーズ・アメリカン・パイオニア・ロード（Japanese American Pioneer Road）」の頭文字をとって「JAP ロード」はどうか、という皮肉を交えたものもあった[58]。

タナマチは、エンタープライズ紙で改名運動が初めて報道された数カ月後に、同紙の投書欄でまず自分の意見を訴えていた。「ジャップ」は人種的な蔑称であり、どんな理由があろうとも道の名前にふさわしくないと、彼女は地元住民を説得しようとした[59]。住民からの批判的な投書が増えてくると、タナマチは同紙に特別寄稿して反論した。先述した、日本人への憎悪に満ちた退役軍人からの投書に対しては、アメリカで生まれ育った彼女のような日系人はアメリカ人としての誇りを持っており、日本生まれの日本人とは区別されるべきだと強調した[60]。また、少数の人々もタナマチの主張に共感を示した。タナマチの親友でもある第二次大戦の退役軍人は、彼女を非難した人々を批判し、テキサスの人々は、日系人が祖国アメリカに尽くした功績に対して感謝する理由があると諭した[61]。この人物は、ヨーロッパの戦場で日系人部隊に救出されたテキサス大隊の一人であった。また、タナマチの郷里付近に住む彼女の妹も、姉を支援する投書をした[62]。両親が日本に一度も行っていないことや、兄弟たちの配偶者が非日系人を含む多様な民族背景を持つことに言及した上で、タナマチ一家全員が誇り高きアメリカ人、テキサス人であることを強調した。

個人的にタナマチを知っているわけではないと思われる読者からも、

冷静で中立的な声が寄せられた。ボーモント市民の一人は、全員が罵りあいをやめて平和的な解決方法を模索するべきだと述べた[63]。ボーモント在住の第二次大戦退役軍人の一人は、日本の戦争犯罪に対する怒りに満ちた投書を激しく批判した[64]。またある住民は、新名称を公募によって決定し、州の公的機関で日本人米作者を顕彰する記念碑を建立するという解決策を提案した[65]。エンタープライズ紙はこのように読者欄を通じて住民が議論する場を提供したほか、論争の経過を報道していたが、社説ではタナマチの主張を支持していた[66]。同紙は「ジャップ」という言葉の背後にある否定的な意味や、人種差別や偏見の歴史を指摘し、郡議会が改名にむけたイニシアチブをとるべきであると示唆していた。

2-3　日系アメリカ人コミュニティからの反応

ジャップ・ロードに関する問題は、日系コミュニティ全体にある程度のインパクトを与えたものの、コミュニティからの支援はタナマチが最初に期待したほど大きくなかった。当初はJACL本部もヒューストン地方支部もこの問題を気にかけていなかった。JACLからようやく公式に支援を得られるようになったのは、以前本部代表を務めたことのあるタナマチの友人が、ヒューストン支部に支援をするよう提案してからのことであった[67]。それ以後は、ヒューストン支部会長のベティ・ワキがタナマチの支援をするようになったが、本部は彼女の要求に反応を示さないままだった。

JACL本部が無関心だった一方、会員向けの機関紙『パシフィック・シチズン』はタナマチの改名運動を支援し、この問題を1993年1月22日号の一面に取り上げた[68]。この頃までには、この問題はすでにボーモント周辺で論争となっていた。記事には、ジャップ・ロードの道路標識と、「ジャップ・ロードを行くと」というキャッチコピーのあるレストラン「ブーンドックス」の看板の写真も掲載された。記事は、タナマチが職場の小学校で嫌がらせの電話を受けていることや、周囲の人々から冷たい態度をとられていることも伝えた。記事はまた、ジェファーソン

郡にあるジャップ・ロードだけでなく、隣のオレンジ郡にも真弓と同時期に米作を開始した岸吉松に由来するジャップ・レーンがあることを紹介している。同じような歴史背景によるものの、前者の由来である真弓は最終的に日本に帰国したが、後者の岸はテキサスに永住し、彼の子孫は現在でもその地域に住んでいる。岸農場の歴史は地域住民もよく知るところであり、すでに彼を顕彰する記念碑も建立されていた。記事は、ヒューストン支部会長のワキが、ジャップ・レーン近隣に住む、90歳になる岸吉松の息子・太郎を訪問したことを報じている。ワキは、ジャップ・レーンの改名に岸太郎も賛同すると思っていたところ、彼を含む家族はそれに反対していることを知った。

パシフィック・シチズン紙で最初にジャップ・ロード改名問題が掲載されてから、タナマチとワキは「テキサスの人種差別と戦う」ための支援を全米の読者に訴え始めた[69]。彼女たちに共感した同紙の編集者もこの問題を報じ続け、タナマチだけでなくすべての日系アメリカ人に敵意のある、ボーモント市民からの手紙についても紹介した[70]。JACL理事の中にはタナマチの運動に賛同を表明する者もあらわれ始めたが、本部事務局長のデニス・ハヤシはこの問題に対して沈黙を続けた。ハヤシの態度にワキとタナマチは不信感を抱かざるを得なかった[71]。

パシフィック・シチズンでも、この問題についての意見を投書する読者が現れはじめた。同紙の読者欄における議論は、テキサス東部の地方紙上であったものほど活発だったわけではないが、日系アメリカ人読者のすべてが改名に対して即座に賛同したわけではなかったことを示している。ヒューストン在住の日系女性は、タナマチの運動を迷惑だとし、小さな町で人種論争をけしかける必要はなく、ジャップ・ロードは大した問題ではないと述べた[72]。カリフォルニア州ウォールナットクリーク在住の読者は、日系コミュニティの間でこの問題に対する一致した見解がないことを指摘し、「ジャップ」という言葉に対する感情的な意味合いを取り除かなければならないと述べた[73]。その一方で、何人かの読者は、この問題を人種差別に対する闘争とみなし、タナマチの運動に賛同

した[74]。問題は道の名前にあるだけではなく、これを問題ではないと考える日系アメリカ人がいること自体が問題だと主張する声もあった[75]。紙上における賛否が分かれたため、タナマチとワキが日系コミュニティから組織的な支援を受けることは困難だった。

ボーモント周辺に住む少数の日系人は、この問題に関わることを避けた。1990 年の国勢調査によればジェファーソン郡とオレンジ郡の日系人口はあわせて 100 人ほどにすぎない。かつてタナマチは、ボーモント周辺に住む日系人とも親しくしていたが、改名論争が明るみに出て以降、かれらとの交流はとだえた[76]。家族を除き、日系の隣人からの支援をタナマチはほとんど得ることができなかったのである[77]。

2-4 論争の結末

ジャップ・ロードの問題が初めて新聞に報じられて 9 か月が経った 1993 年 5 月、連邦政府で公民権問題を担当する司法次官補からの手紙がエンタープライズ紙に掲載され、改名論争は一段と激しさを増した。司法次官補はドミング郡議員に宛てた文書で、タナマチの改名の要求を支持する旨を伝えたのである[78]。次官補は、「ジャップ・ロード」は連邦法に違反するものではないと認める一方、道の名称が「偏見を継続させるより、わが国家の公民権の進歩を反映」できるように改名することが望ましいと提案した。

その翌月には公聴会が開催され、ジャップ・ロードをめぐる論争はピークを迎えた。ドミング議員は、タナマチが住民と直接話し合いをしない限り、郡議会でこの問題を議論するつもりはないと繰り返し強調してきた。こうしたドミングの条件に従い、タナマチはワキとともに、6 月 23 日にボーモント市内の郡裁判所で公聴会を開催することを決定し、地元住民を招いた[79]。しかし、地元住民によるグループ「ジャップ・ロードを守る会（Keep Jap Road Committee）」は、彼女の会議に出席しないことを事前に公式に伝えてきた。逆に、かれらは 6 月 18 日にファネットの小学校講堂で独自の公聴会を主催し、タナマチとドミング議員を招

待した[80]。

場所も日程も異なる二つの公聴会は、タナマチと住民の間の対立の激しさを示している。住民は、タナマチがファネットに来て、住民の意見を直接聞くことが絶対不可欠だと考えていた。公聴会は、彼らのコミュニティであるファネットで行われるべきであり、ボーモント市内にある郡裁判所のような役人の膝元で行うことは考えられなかった[81]。ファネットでの公聴会に先だつ6月14日、40人ほどの住民が郡議会に詰めかけ、ジャップ・ロードの存続を訴えていた[82]。当初タナマチは、ファネットで公聴会を開催するつもりでいたが、住民から脅迫めいた電話を受けて考えを変えたと、エンタープライズ紙に語った[83]。ジャップ・ロードに住むある女性は、「私たちがどんな気持ちでいるか教えてあげるから、あんたはここ（ファネット）に来なきゃいけない」と彼女に話した。別の女性はまた、タナマチは「トラブルメーカー」だからファネットに来る必要があると言った。実際、彼女は様々な嫌がらせを受けており、自宅の郵便受けが何者かによってエアガンで破壊され、見知らぬ人に突然「国へ帰れ！」と罵声を浴びせられたこともあった[84]。熟慮の末、タナマチはファネットでの公聴会開催をあきらめ、かつ、住民主催の公聴会にも出席しないことにした。ワキはファネットの公聴会に付き添うつもりだったが、住民からの招待は「脅迫めいて」おり、タナマチの身の安全を心配して、出席をあきらめることにした[85]。

結局、住民たちの公聴会には、ドミング議員と司法省の代表者を含めた100人以上が出席したが、そこにタナマチとワキの姿はなかった。ジャップ・ロード存続を強く求める住民の声を直接聞いたドミング議員は、「この問題は終わりだ」と参加者にむけて宣言した[86]。一方、住民たちの出席が見込めないことを知ったタナマチは、市内で予定していた公聴会を中止せざるを得なかった[87]。

住民らの公聴会開催によって、改名論争は決着がついたも同然であった。タナマチと住民が直接話し合う機会はないまま、7月12日の郡議会で改名問題が議論された[88]。改名の声を上げてから約1年後、タナマ

チは議会で初めて住民たちと顔を合わせた。この会議には、住民たちだけでなく、タナマチを支援する人々や団体が多数出席していた。支援者の中には、タナマチの友人や家族のほか、公民権を専門とするスコット・ニュワー弁護士、JACL ヒューストン支部、名誉棄損防止同盟（Anti-Defamation League, 以下 ADL）、ラテン系アメリカ人連合（The League of United Latin American Citizens, 以下 LULAC）、テキサス自由人権協会（Texas Civil Liberties Union）といった複数の公民権団体の代表者がいた[89]。支援者たちは、人種差別や偏見についての個人的体験もまじえながら、ジャップ・ロード改名の必要性を懸命に訴え、それは時に感傷的な雰囲気を会場にもたらしたが、議題にあがる前からすでに決定されていたような結論を覆すことはできなかった。

4 名の郡議員のうち 3 名と郡判事 1 名がタナマチの提案を拒否し、ジャップ・ロードの存続が決定した一方、議員の中で唯一の非白人であるアフリカ系のエド・ムーアだけが改名を支持した[90]。JACL ヒューストン支部会長のワキは、後にパシフィック・シチズン紙にムーアのコメントを以下のように語っている。ファネットに住む日系人もジャップ・ロードは不愉快なものではないと言っていたと述べ、存続の根拠を示したドミング議員に対して、ムーアは、日系人らの反応を文字通り受け取ってはならないと指摘した。過去多くのアフリカ系アメリカ人が南部の人種差別に対して声を上げなかったように、その日系人たちは「ジャップ・ロード」に対する本当の想いを決して白人の委員に話すことはないだろう。日系人たちはマイノリティであり、白人が支配する社会で生き抜く術を見つけなければいけないのだ、とムーアは述べた[91]。黒人のムーアだけが、ジャップ・ロードを人種差別の問題であるとみなしていた。

郡議会が公式にタナマチの要求を退けた後、ジャップ・ロードをめぐる熱い論争は、地方紙でも急速に冷めていった。この論争はテキサス南東部以外のダラスや、カリフォルニア州、日本でさえも報じられたが、大きな運動に結びつくことはなかった[92]。パシフィック・シチズン紙で

もジャップ・ロードに関する記事は徐々に減少していったが、1994 年の新年特別号には、真弓や岸を含むテキサスの日本人米作者の歴史が特集された[93]。タナマチとワキは郡議会での敗北後、司法的なアプローチから改名運動を継続させた[94]。だが、間もなくしてタナマチは夫の転勤により、ボーモントから 120 マイル以上離れた、ヒューストンの南に位置するレイク・ジャクソン市へ引っ越し、やがて地域住民も改名論争を頭の片隅に追いやり、ジャップ・ロードは依然として存在し続けた。

タナマチが改名を達成できなかった原因の一つに、ジャップ・ロードの住民も周辺の日系コミュニティも、彼女を地域コミュニティの一員とみなしておらず、よそ者とみなしていたという点があげられるだろう。彼女がテキサスで生まれ育ち、ボーモントに住んでいたという事実だけでは、彼女を「ローカル」なコミュニティの一員とみなすのに不十分だった。結局、彼女は自分の家族の歴史と、真弓兄弟の歴史に、共通点を見出すことができなかった。彼女の祖父は確かに岸農場で働いたこともあったが、テキサス南東部の日系コミュニティとの強いつながりを持っていたわけではない。改名論争が明るみに出て以降、彼女はボーモントの日系コミュニティでも疎外されてしまった。ジャップ・ロードは彼女のような愛国的な日系人すべてを傷つけるという彼女の主張は、正当性を維持することができなかった。また、彼女が地域住民と直接対話しなかったことによって、地元に対する誠実さに欠けるという印象を、郡議会に与えてしまった。その結果、改名を支持する連邦政府の提言があったにもかかわらず、郡議会はジャップ・ロード住民の意向を優先させたのである。

3．ジャップ・ロード改名論争（2003 ～ 2004 年）

3-1　新たなメディア戦略

ジャップ・ロード改名をめぐる問題は、10 年の歳月を経て再び激しい論争を呼び覚ました。しかも、10 年前よりも広範かつ強烈な注目を

浴びて。ボーモント転出後も、タナマチは改名運動を続け、日系コミュニティやその他の公民権団体からの支持を徐々に集めるようになっていた。ハワイ出身の日系人ヘリコプターパイロット、トーマス・クワハラは2001年頃から彼女の活動に関わり始めた。彼はルイジアナ州にある自宅から、テキサス州オースティン市まで車で移動していた途中、偶然ジャップ・ロードを通りがかり、衝撃を受けた[95]。彼がタナマチに連絡してから間もなく、彼女はサンフランシスコやシアトルで活動する日系人の公民権活動家や弁護士から支援を約束された。様々な地域から集結したこれらの人々は、2003年に「ジャップ・ロード改名を求める会（Committee to Change Jap Road, 以下CCJR）」を結成し、ADLや全米黒人地位向上協会（National Association for the Advancement of Colored People, 以下NAACP）などの公民権団体からの支持を得て、改名運動にふたたび取り組み始めた[96]。今回CCJRは法律的なアプローチで改名を目指すべく、10年前の改名論争にも関わった公民権を専門とする弁護士、スコット・ニュワーに協力を求めた。2003年8月、ADLは司法的観点から改名を求める手紙を、ジェファーソン郡裁判官に送った。ジェファーソン郡裁判所は、「ジャップ」が人を不快にさせる言葉であると認めつつも、道の名称を変更させる法的権力を行使する立場にないことを表明した[97]。CCJRとジェファーソン郡の間の一連のやりとりは、地域住民には知らされなかった。だが、同年末CCJRは思い切った行動に出た。

2003年12月2日、CCJRとニュワー弁護士はジェファーソン郡に対する告訴についての記者会見を行い、郡議会と地域住民をひどく驚かせた。会見でニュワー弁護士は、ジェファーソン郡のジャップ・ロードは公民権の侵害であり、改名されるまで同郡に対する連邦政府予算の交付停止を、運輸省と住宅都市開発省に求めると述べた。当時の運輸省長官は日系アメリカ人で最初の閣僚となったノーマン・ミネタであった。この訴状は、ADL、LULAC、JACL本部、中国系アメリカ人組織（the Organization of Chinese Americans, 以下OCA）、NAACPを含む複数の公民権団体からの賛同を得ていた[98]。ニュワー弁護士はジャップ・ロードと

いう攻撃的な名前のせいで、日系人はこの周辺に移住する自由を奪われていると訴えた。

CCJR とその支援者らは告訴を通じて、人種差別的な名前の道が日系人の心を傷つけていることを、全米の主要メディアにむけて戦略的にアピールした。実際のところ、告訴そのものは法的根拠が十分ではないという理由から、連邦政府機関がジェファーソン郡に何らかの措置をすることはなかった[99]。それにもかかわらず、この告訴は全米だけでなく、日本のメディアからの注目も集めた。地元のエンタープライズ紙は、記者会見当日の朝刊一面で、ジェファーソン郡のジャップ・ロードとオレンジ郡のジャップ・レーンの道路標識の写真を大きく掲載し、この問題を取り上げた[100]。翌日 CNN もロイター通信を通じてこの記者会見を報道し、ジャップ・ロードの問題は、後に日本の朝日新聞でも取り上げられた[101]。やがてこのニュースは、ロサンゼルスで日本の新聞支社に勤務していた、真弓吉雄の曾孫にあたるリンダ・真弓・クリッカーの耳にも入ることになった。曾祖父を称えて命名された道だと知って驚いたクリッカーは、その後ファネットの農場跡地に足を運んだ。

3-2　地域住民の反応

ジャップ・ロードの近隣住民は、思いもしなかった形でこの問題が再燃したことにひどくショックを受けた。郡議会がタナマチの要求を退け、彼女もその後ボーモントから転出したことで、住民のほとんどは、問題はとっくに解決したものだと思い込んでいた。論争の再発を受けて、この時も大半の住民は改名に反対した。その一方で、これまでにない過熱報道を知り、状況が 10 年前とは違うことを多くの人が気づいていた。ジャップ・ロード住民は、遠方から取材にきた報道陣が静かな田舎町にどっと押し寄せるのを見て、激しく動揺した。多くの住民が、報道陣のせいで自分たちの日常生活はめちゃくちゃになってしまったと感じていた。

ジャップ・ロードやその周辺地域に対する否定的なイメージの拡散

を受け、ジェファーソン郡議会は改名に向けて動き出すことになった。10 年前にタナマチの要求を退けたドミング議員は、記者会見の直後、CCJR が郡議員の誰にも接触していないことを遠回しに批判していたが、数週間後には「ジェファーソン郡に住むすべての人の利益のために」改名を検討し始めたと語った[102]。ジェファーソン郡の醜聞の拡散を防ぐために、一刻も早い改名が必要であることを地域社会は感じ始めていた。年が明けて間もない頃、地元のエンタープライズ紙は社説において、郡議会が改名を検討していることを「よい知らせ」と報じる一方、郡議会で改名の議論が始まるのは早くても 3 月か 4 月になるということを「悪い知らせ」としている。ハワイ州ホノルル市も郡議員に対して公式に改名を求めており、社説は、郡議会がこの問題に関して高い指導力を発揮すべきだと述べている[103]。ようやく郡議会で改名が議論されることになったのは、7 月に入ってからのことであった。

7 月の郡議会の開催が近づくにつれて、ジャップ・ロードに関する報道は全国的に広がり、ますます過熱していった。多くのメディアが、ファネットを、奴隷制に代表される南部社会の負の遺産を引き継いだ、時代遅れの人種差別主義者のコミュニティとして描き、侮蔑的な「ジャップ・ロード」の存在そのものが、住民の人種差別や偏見に対する無関心を反映していると報じた。例えば、ニューヨーク・タイムズは、ジャップ・ロード住民たちを次のように描いている。ジャップ・ロードがあるのは、「牧場風の家屋」や「壊れそうなトレーラーハウス」、「閉店した銃器店」が点々とする、テキサス東部の町はずれだ。「ジャップ・カー」（日本製車）や「ジャップ・バイク」（日本製バイク）は、これまでさんざん聞いてきたのに、「なぜジャップ・ロードだけ駄目なのか」と言うのは、地場産業の石油化学工場を退職した一住民。愛車のハーレー・ダビッドソンと並んで写る、元配管工で、銃器店を経営していたこともある別の住民は、「道の名前が気にいらないやつは、ここに近づかなければいい」と答える。近隣にあるバーでは、100 人ほどの住民がビールを飲み、バーベキューを食べながら、改名賛成派の目論見をどうやったら

阻止できるかと協議している——[104]。このようにメディアは、ジャップ・ロードの住民を、南部の田舎に住む白人労働者階級の集団として描き、このような人々はアメリカのメインストリームにおける人種問題には鈍感で、都市に住む人々とかけ離れた感覚をもっているというステレオタイプを強調した。ジェファーソン郡議員のジミー・コキノスは、偶然滞在していたニューヨークでこの記事を読み、自分の管轄する郡が全米で醜態をさらしていることをひどく恥じた[105]。また別の新聞は、1998年にテキサス州ジャスパーで、アフリカ系アメリカ人が惨殺された残酷なヘイトクライムに言及し、ジャップ・ロードは、テキサスが人種差別の負の遺産を乗り越えられていないことの象徴だと示唆した[106]。

地元のエンタープライズ紙の読者欄は、このときも郡議会に先んじて、改名の是非を議論する場になった。改名に賛同する活動家も同紙の読者欄に投書したが、それらはADLヒューストン支部や、シカゴを拠点としたJACL中西部代表者など、ボーモントの「外」からの声であった[107]。そうしたものも含め、読者欄には改名に賛成する意見や、より中立的な意見が10年前よりも多く掲載された。一方、改名に反対する住民からは、日本の戦争犯罪に対する批判や、「ジャップ」は略称にすぎないというような、10年前と同じような意見が繰り返された[108]。しかし、論調は以前と異なっていた。多くの住民は、改名の是非以上に、ファネットに住んでもいない「外部」の人々が地域の問題に干渉してきたことに対して、激しい怒りを表明したのである[109]。

多くの地域住民は、主要メディアによって自分たちのコミュニティが人種差別主義の烙印を押されたことに、強い怒りと悲しみを訴えた。10年前改名に反対した、ジャップ・ロード住民の一人は、「全世界の人々が、テキサス南東部の私たちの小さな町を偏見の目で見ている」という理由から、改名したほうがいいと思っていると吐露した[110]。またある住民は、主要メディアの報道に対する地域コミュニティの無力さを嘆いて、「私のことを何一つ知らない人々が、私や隣人のことを人種差別主義者だと決めつけることに、個人として傷ついている」と述べた[111]。住民

たちは、道の名前を変更することは、彼らの生活、歴史、アイデンティティの一部の喪失であると主張した。ジャップ・ロードは人種差別的な名前ではないし、したがってそこに住む人々も人種差別主義者ではない――住民たちは人種差別主義者ではないことを何とか証明しようとした。ある住民は、日系人が地域の教育委員を務めていることを挙げ、またある住民は、自分の娘がプエルトリコ人と結婚したことをあげて、非白人に対する寛容さを主張することで、人種差別主義者のレッテルを否定した[112]。

それでも、地域住民は改名論争に明白な立場をとることに、ジレンマを感じていた。改名反対の根拠として、かれらは、ジャップ・ロードにおける人種差別的な意味を否定し、真弓の歴史に対する愛着を強調した。三世代に渡ってジャップ・ロードに居住してきた住民の一人は、真弓の物語は住民の間で代々継承されてきた、「愛」にあふれた物語で、「憎悪」の物語ではないと主張した[113]。しかし、報道によって、ファネットのコミュニティに否定的なイメージが植え付けられてしまった今となっては、地域住民が道の命名の歴史への純粋な愛着を強調し、人種差別を否定すればするほど、それこそかれらがいかに人種差別に鈍感であるか示すものだ、という批判を受けかねなかった。一方、タナマチからの改名の要求を受け入れたとすると、やはり命名の背後に、人種差別があったと認めてしまうことになる。賛否どちらの立場を取ったとしても、人種差別主義者であるとみなされてしまうことになりかねないのである。住民の中には、自分の立場を正当化するための議論に疲れ果ててしまい、すべてを「赦す」、平和的な解決を求める者もあった[114]。

3-3　日系コミュニティの反応

今回の改名論争では、日系アメリカ人コミュニティは多大な組織的支援を寄せた。10 年前は無関心だった JACL 本部は、ジェファーソン郡に対する CCJR の告訴にすぐ賛同し、郡議員への手紙や、インターネットを利用したオンラインの署名運動など、全米の会員に支援を呼び掛けた[115]。

機関紙パシフィック・シチズンも改名論争を大きく取り上げ、読者からの支援の投書を掲載した[116]。日系アメリカ人退役軍人協会（Japanese American Veterans Association, 以下 JAVA）もまた、全米に広がるネットワークを利用して改名運動を支援し、主要メディアがこの問題を取り上げるよう働きかけた。インターネットや電子メールなどは、CCJR やその支援団体が、日系コミュニティやその賛同者から、全米あるいは国境を超えて支援を得るのに、特に重要な役割を果たした[117]。トーマス・クワハラが製作した CCJR のウェブサイトを通して、支援団体は改名運動の最新情報を伝え、さらなる支援を募ることができた。今回日系コミュニティから大きな支援を得て、改名を達成することができた理由として、タナマチはインターネットが大きな役割を果たしたと振り返っている[118]。

JACL ヒューストン支部は、改名には賛同していたが、当初は CCJR やその支援者と異なる姿勢を取っていた。10 年前タナマチが改名の声を上げた際、当時支部会長を務めていたワキはタナマチを支援し、その後も運動を続けていた。2002 年にヘンリー・タカタ（仮名）が新しい支部会長に選出されてから、支部は地域の日系人家族の物語を収集する新しいプロジェクトを開始した。タカタはそのことについて以下のように語った。

> ヒューストン支部が改名を求めた時、何も起こりませんでした。私が会長になって、私たち支部の会員は、ジャップ・レーンやジャップ・ロードも含めた家族の物語を収集しようと決めました。そうすれば、私たちが望むのはもともとの入植者を顕彰することであり、（ジャップではなく）彼らの名前をつけたいのだと、（非日系人の）地元の人々も理解してくれるだろうと考えたのです[119]。

テキサス日系人の家族の物語は、子孫からの聞き取りなどが行われて、ヒューストン支部のウェブサイトで公開された[120]。ジャップ・ロードや

ジャップ・レーン住民との感情的な対立を避けようと、支部は道の名前の人種差別的な意味を指摘するかわりに、「ジャップ」ではなく、元々の入植者の名前で顕彰することの重要性を、住民に理解してもらうことを目指した。しかし、2003 年末に CCJR と ADL が改名を求めてジェファーソン郡を告訴してから、こうした支部の穏やかな姿勢は変更を余儀なくされた。報道が過熱する中、多くの地域住民が感情的になり、ヒューストン支部が改名に向けて住民と対話することは極めて困難になった。結局、支部は CCJR やその支援者と協力して改名を目指すことになった。

真弓吉雄の曾孫にあたる、リンダ・真弓・クリッカーの存在は、改名運動を展開する日系コミュニティにとっては重要な意味を持っていた。彼女は吉雄の孫にあたる日本人の母とドイツ人の父親の間に生まれ、東京や神戸で育ち、1994 年にロサンゼルスに赴任する前はドイツに一年間住んでいたこともあった[121]。曾祖父がテキサスで米作を営んでいたことは母親から聞いたことがあったものの、ジャップ・ロードの存在については知らず、まさかそれをめぐる論争でファネットを訪れることになろうとは想像もしていなかった。日本の永住権とドイツ国籍を持ち、英語、日本語、ドイツ語を話し、多文化環境で育ってきたクリッカーは、自らを「世界市民」と呼ぶ。彼女は改名に賛成の立場を示した。「ジャップ・ロード」によって個人的に侮辱されたと彼女自身は思わないが、ロサンゼルスで 10 年近く住んできた経験から、多くの日系人が侮蔑的だと感じるのは十分理解できた。彼女にとって、改名しないという選択肢は考えられなかった。改名論争を知った後、クリッカーはファネットを訪ね、日系人活動家と地域住民の双方と話し、公聴会にも出席した。しかし、クリッカーの改名賛同によって、日系アメリカ人は改名の要求に一定の正当性を得たといってよい。彼女がこの問題に関わる真弓吉雄の唯一の家族であったため、メディアも特に彼女の意見に注目した。

JACL ヒューストン支部が改名運動を積極的に展開する一方で、ボーモントに住む一握りの日系人は、10 年前と同じように沈黙を保った。か

れらは自分の意見を表明せず、改名問題についての地元の集会にも出席しなかった。改名運動の支援団体の一つでもあるJAVA副会長のテリー・シマは、かれらの沈黙に対して理解を示し、いかにも日系人らしいと評した。ボーモントのような日系人人口がわずかしかいないコミュニティでは、日系人は「波風を立てぬよう黙っている」ものだと彼は述べた[122]。だが、ファネットに近いラベル（La Belle）に住む日系人のビル・コンドウは、しばらくしてようやく口を開いた。

> ファネットに人種差別はない・・・。確かに、「ジャップ」というのはいくらか侮蔑的だろう。でも、私はどう呼ばれようと気にしない。たかが名前じゃないか。たいしたことはない。無理やり変えることはない。ここらの人は改名には反対だ。そういう時代だった。みんなそれに従わなきゃならない[123]。

彼の祖父、近藤佐太郎は、1910年にオレンジ郡の岸吉松の米作農場の組合農夫としてテキサスにやってきた[124]。佐太郎はやがて自作農となり、そのままテキサスに永住した。孫にあたるビル・コンドウはかつて化学技師だったが、1980年から家族の米作事業を継いでいた[125]。ボーモントで生まれ育ったコンドウの、「ジャップ」という言葉に対する考えは、都市部に住むテリー・シマや、日系人コミュニティで育ったタナマチやクワハラとは異なっていた。

3-4　論争の結末

報道がピークを迎えた、2004年7月19日、ジェファーソン郡議会は改名問題についての公聴会を開催した。会場は、ニューヨーク・タイムズや日本のテレビ局を含めた報道陣や、主要な公民権団体代表者などで満席となった。個人的な興味から、傍聴のために何百マイルも離れた地域からやってきた者もいた。改名賛成派・反対派も含めて、多くの人々が公聴会で自身の意見を主張した。賛成派と反対派は会場の左右に分か

れて着席していたため、誰が賛成で反対なのかは一目瞭然であった[126]。意見の相違は、人種の相違でも明白に見て取れた。改名反対派の大多数が白人であったのに対して、賛成派は、白人、アフリカ系、ラティーノ、中国系、日系を含む多様な人種で構成されていた。ビル・コンドウのような地元の日系人は、公聴会に出席しなかった。3 時間以上におよんだ公聴会では、22 名の改名賛成派、23 名の反対派が証言し、極めて感情的な証言もあった[127]。反対派のほとんどが、ジャップ・ロードかその周辺に住む住民だったのに対し、賛成派は人種や民族だけでなく、ジャップ・ロードとの関連や居住地といった点でも多様な人々であった。改名賛成の証言をした者の中には、ワシントン DC から駆け付けた JAVA 代表、ADL、LULAC、NAACP、JACL といった様々な公民権団体の代表者がいた。CCJR のメンバーも公聴会で証言をするために、西海岸から出席した。また、第二次世界大戦における日系人の英雄としてよく知られている、ハワイ州選出の上院議員ダニエル・イノウエからの手紙が、代理人によって読み上げられた。

長時間に渡る証言の末、郡議会はジャップ・ロードの名称変更を決定した。議会の中で、マーク・ドミング議員だけは投票を棄権し、そこに住む人々だけが名称を決定する権利があると主張した。郡議会が改名を決定したのは、郡の悪評が報道によって国内外に拡散することを懸念したためであった。投票の直前、郡判事のグリフィスは、「私たちを人種差別主義者だと思っている人々がいる。それは真実からはとても、とても、とてもかけ離れている」とコメントした[128]。グリフィス判事は、10 日以内に新名称を選ぶことをジャップ・ロード住民に命じると同時に、真弓吉雄を顕彰する記念碑を道沿いに設置することを決定した。判事を含め、何人かの住民と、ADL が記念碑のための寄付を申し出た。

しかし、改名運動の成功に喜んだ日系人らは、新しい道の名前を知って落胆した。約 170 名の「元」ジャップ・ロード住民による投票で選ばれたのは、「ブーンドックス・ロード（Boondocks Road）」であった（図 3）。それは、かつてその道路沿いにあったレストラン「ブーンドック

ス」に由来するものであった。タナマチにとって皮肉なことに、彼女が改名の声をあげるきっかけとなったレストラン「ブーンドックス」が、ジャップ・ロードにかわる新しい名前になったのである。住民たちが、真弓の歴史への敬意を改名反対の根拠としていたことから、彼女を含めたCCJRのメンバーは、「マユミ・ロード」やその他日本人を顕彰するための名称が選ばれることを期待していた。しかし、住民たちはタナマチや日系人団体をトラブルメーカーとみなしており、彼らに対してひどく怒っていたのである。住民の多くは、「かれら活動家が（住民に対して）やったことのせいで」、日本に関連するものを新名称に選びたくないと思っていた[129]。また、誰も傷つかないような名称がふさわしいとも考えていた。投票を取り仕切った住民の一人は、郡議会への手紙で、「ブーンドックスと名付けることで、誰かを傷つけることは減るだろう」と説明した。

住民たちは「ブーンドックス・ロード」を新名称に選ぶことによって、日系人やその支援者、また、ファネットを人種差別主義者のコミュニティとして描いたメディアに対する、かれらなりの抵抗を示したとも言えるであろう。「ブーンドックス」という言葉には「都市から遠く離

図3 新しい道路標識（2008年2月筆者撮影）

れた田舎」という意味もあり、新名称は住民たちが自らを揶揄するような響き―自分たちは都会の人々とは異なる感性を持った田舎者なのだ―を含むと考えられなくもない。外部の人々から共感を得られず、改名の阻止もかなわなかった今、住民たちは、頑固で保守的で、時代遅れな「ブーンドックスの人々＝田舎者」の役割をあえて引き受けることで、こうした「後進性」におけるある種のプライドを示したともいえよう。

さらに、日系人と関わりのないものを新名称に選ぶことで、住民たちはジャップ・ロード改名論争の苦い記憶を積極的に忘却し、新しい記憶を新名称のもとで作り出そうとしているとも言える。誰も傷つける意図はなかったはずの「ジャップ・ロード」は、日系人を侮辱するものと批判され、住民らは人種差別主義者と名指された。そうであれば、新名称は、今後住民を含めた誰をも傷つけないようなものでなくてはならなかった。新名称を「マユミ・ロード」や「ジャパニーズ・ロード」とすることは、改名論争における住民側の「敗北」と人種差別主義者と謗られたつらい記憶を呼び覚ますものとなり、逆に住民を傷つけることになる。「ブーンドックス」は誰も傷つかないものであり、それは住民が独占できる表象でもあった。由来となった地元の人気レストランはすでに閉店しており、それはかれらの記憶の中だけにしか存在しないからだ。

ジェファーソン郡のジャップ・ロード改名論争の結末は、すぐに他の地域にも影響を及ぼした。改名決定から数か月後、同じテキサス州フォート・ベンド郡にあったもう一つのジャップ・ロードも、ジェファーソン郡であったような「悪評を避けるため」、「ムーア・ランチ・ロード（Moore Ranch Road）」に改名された。同郡のジャップ・ロードの由来は、日本人米作者によるものなのか不明であったため、改名に異を唱える者はいなかった[130]。フロリダ州マイアミに近いハイランド・ビーチの海岸にあった岩、「ジャップ・ロック」は20世紀初頭の日本人移住者に由来するものだったが、同じ頃「ヤマト・ロック」に改名された[131]。翌年、テキサス州オレンジ郡のジャップ・レーンも郡議会の決定により、「ダンカンウッズ・レーン（Duncanwoods Lane）」、「ジャパニーズ・レー

ン」、「ケイジャン・ウェイ（Cajun Way）」の 3 つの道に分割された上で改名された[132]。最初にジャップ・ロード改名の声を上げたサンドラ・タナマチは、一躍日系人コミュニティのヒロインとなった。JACL をはじめ、多くの公民権団体が、改名運動に対する彼女の功績を讃えた[133]。日本政府も在ヒューストン日本総領事館を通じて、タナマチに外務大臣賞を授与し、2007 年に日系アメリカ人リーダー訪日招聘団の一人として彼女を招聘した[134]。

2008 年 3 月には、真弓吉雄の米作農場の功績をたたえる記念碑が、現在のブーンドックス・ロード沿いに設置された（図 4）。2004 年の改名論争で地域住民のまとめ役をつとめた住民の一人が、郡の歴史委員に選出され、タナマチと ADL と共同で記念碑の文言を作成した。記念碑は、地域の米作産業の発展における真弓農場の貢献について述べているものの、改名論争やかつてジャップ・ロードという名前の道があったことには言及していない。文言の作成に関わった住民は、元々は真弓が道の名前として顕彰されていたことを含めたかったが、タナマチと ADL は「ジャップ」という言葉が記念碑に残ることに強く反対したため、あきらめたと言う[135]。タナマチとその支援者はジャップ・ロードをマユミ・ロードに改名することはできなかったが、新しく設置された記念碑は、彼女たちが望んだような適切な方法で、ブーンドックス・ロードの片隅でひっそりと真弓を顕彰し直している。

図 4　真弓の米作事業についての記念碑（2015 年住民撮影）

おわりに

最後に、テキサス州ジェファーソン郡におけるジャップ・ロード改名論争を

通して、過去を記憶し、記念／顕彰することの政治性、1990年代から2000年代のアメリカ社会における多文化主義の変遷という二つの問題を考えてみたい。まず、道のような公共空間において、過去をどのように記念／顕彰するのが適切なのであろうか。過去を顕彰する道の名前は、「場所の表象のポリティクスを支配する人々に正常性と正当性を与える、象徴的で物質的な秩序の一部」である、と地理学者のバーグとカーンズは指摘する[136]。場所を名付けるという行為には、その場所における支配的な集団の見解が強い影響力を持つ。20世紀初頭に命名されてから1992年に改名を求める声が上がるまで、ジャップ・ロードは非日系人を大多数とするファネットのコミュニティの秩序であった。真弓農場があった当時も、第二次大戦後も、たとえ「ジャップ」が日系人に対する蔑称であるという認識が広まった時代にあっても、ファネットにおける「ジャップ・ロード」の正当性はゆるがなかった。その由来となった真弓吉雄は、その場所において自身がどのように記憶され、顕彰されるかに関して、まったく影響力を及ぼすことができなかった。それは空間的にも時間的にも不可能であったには違いないが、「ジャップ・ロード」はファネットの人種関係における秩序を表象するものでもあった。真弓の歴史とは全く関係のない「ブーンドックス・ロード」が新名称として選ばれたこともまた、新名称の決定権を与えられたファネットの人々が、場所の表象のポリティクスを支配する者として、コミュニティに正常性と正当性を取り戻そうとした結果であると考えられよう。

1992年の最初の論争で改名されなかったジャップ・ロードは、なぜ2003年の二度目の論争で改名されることになったのか。この疑問に対する答えとして、本稿では、活動家たちのメディア戦略や、インターネットによる支援の拡大を指摘したが、10年後の逆転劇は、アメリカ社会における多文化主義に対する姿勢の変化も反映している。1990年代初頭は、1960年代の公民権運動以後の、多文化主義に基づく政策や社会的な意識に対する批判が高まった時代であった。積極的差別是正措置とされたアファーマティヴ・アクションを「逆差別」とみなしたり、制

度を廃止したりする州もあらわれた。女性やマイノリティに対する表現の見直しは、「言葉狩り」と批判されるなど、いわゆるPC（Political Correctness, 政治的正しさ）論争を巻き起こした。教育においては、従来のヨーロッパ史を中心としたカリキュラムから、アフリカやアジア、先住民の歴史を含めた多文化教育が導入されたが、アメリカを分裂させるものとして批判を受けた[137]。1990年代のジャップ・ロード改名論争において、タナマチの改名要求に対して寄せられた批判は、当時のアメリカ社会全体における多文化主義に対する批判的姿勢のあらわれであるともいえる。

1990年代を通して多文化主義は様々な批判を浴びたが、結果的にはアメリカ社会に浸透し、2000年代までには定着することになった。多文化教育に批判的な社会学者ネイサン・グレイザーが、1997年の著書で、「多文化主義は、その独自の方法で、すべての集団が承認されるべきであるという普遍的な要求となった」と述べているように、21世紀に入るまでに、多文化主義はアメリカ社会の規範となっていた[138]。2003年に再燃した論争で、ジャップ・ロードが改名された背景には、このようなアメリカ社会の変化をみてとれる。タナマチらの改名の要求を聞き入れることは、日系アメリカ人という人種的マイノリティもアメリカ社会で承認されて当然であるという、多文化主義の規範を適用することでもあった。

すべての集団が承認されるべきという姿勢は、人種による差別や偏見は根絶すべき明白な悪であるという認識に裏打ちされている。現代のアメリカ社会で、一部の過激な白人至上主義者をのぞいて、人種差別や偏見を肯定する者はいない。こうした社会において、人種差別主義者と名指されることは極めて不名誉であり、そう呼ばれること自体大きな恐怖や怒りを感ぜずにはいられないことである。2000年代の改名論争では、人種差別主義者と名指されることへの恐怖や怒り、反発や懸念が、結果的にジェファーソン郡議会を動かし、改名の達成に至った。

多文化主義以後のアメリカ社会では、人種差別の是正や根絶が声高く

叫ばれ、様々なレベルでそのための努力がなされてきた。だが、その一方で、人種差別主義者と名指された人々の感情には、それほど注目してこなかったように思われる。

私たちはどのようにしたら人種差別主義者（レイシスト）ではないことを証明できるのだろうか。ファネットの住民がおちいった改名の是非をめぐるジレンマは、その証明の不可能性を示している。住民は、ジャップ・ロードという場所の表象のみを通して、人種差別主義者だと非難された。こうした非難に対抗し、人種差別主義者というレッテルを否定するために、かれらは、地元で公職に就いている日系人がいることや、自分の家族が非白人と結婚したことなどを挙げ、多文化主義の規範を守っていることを強調した。しかし、人種差別主義を否定する「証拠」をいくら挙げてみたところで、無意識の、あるいはカムフラージュした人種差別主義者ではないかとの疑惑からは逃れられない。かれらが人種差別主義者か否かを検証することは不毛である。ここで重要なのは、誰かを人種差別主義者だと名指すことが容易であるのに対して、自分はそうではないと立証することはほぼ不可能であるという点である。ファネットや周辺地域をよく知らない傍観者が、「ジャップ・ロード」は人種差別的だと批判し、改名に賛同するのは容易であろうし、また、そうすることで自身の多文化主義の規範を遵守する、リベラルな姿勢を示すことができる。一方、改名反対に共感を示せば、人種差別を擁護する者だという批判を受ける可能性があるだろう[139]。

また、最終的な改名によって、人種差別や偏見の是正という目的を達成することができたのかという点については疑問の余地がある。改名論争の結果、ファネット住民はタナマチをはじめとした日系人活動家に対して激しい怒りを感じ、新名称の選択に見るように、かれらに対して心を閉ざしてしまったかのように見える。二度に渡る改名論争では郡議会で対面するまで、タナマチと住民が顔を合わせて対話する機会は一度もなかった。改名から数年後、ブーンドックス・ロード住民の一人は、日本人である筆者を自宅に招き入れ、感情を交えながら次のように語った。

私たちを憎悪する人々によって、私たちはひどい人間だと言われました。私たちを憎悪したのは彼ら（改名運動家）です。彼らに対する憎しみは私たちにはない。そんなものは一切なかった。ここ（ファネット）の人たちは今では［ジャップ・ロードのことを］話したがりません。私たちの話は誰にも聞いてもらえないから[140]。

人種差別や偏見の真の是正や根絶のためには、それを批判する前に、人種差別主義者と呼ばれることへの恐怖や怒りについて、立ち止まって考える必要もあるのではないだろうか。ジャップ・ロード改名論争で地元紙の読者欄においてみられたような激しい議論は、現代ではどのような形になるであろうか。インターネット空間でほぼ制御なしで議論が瞬時に展開される今日では、誰もが極端な思想への影響にさらされやすく、激しい感情を巻き起こしやすい。直接の対話や対面のないままで増幅する憎悪は、開き直りともとれるような過激な思想への傾倒につながりかねない。南部連合の顕彰をめぐる現在の議論でも、人種差別を糾弾する前に、南部各地の地域社会での文脈も考慮した上での、冷静な対話が必要なのではないのだろうか。

本研究の調査にあたっては、松下国際財団から研究助成を受けた。聞き取り調査等に協力していただいた、すべての方々に感謝申し上げます。

注

1　アラバマ州モントゴメリーを拠点とする公民権団体、Southern Poverty Law Center の調査によれば、南北戦争に関する記念碑や銅像は全米で 718 あり、そのうち約 300 がジョージア、ヴァージニア、およびノースカロライナ州にある。また、109 校の公立学校が南部連合指導者の名前を冠しており、80 の郡や市、10 ヵ所の米軍基地が南部連合にちなんだ名前をもち、南部連合を記念する祝日が 6 州において 9 日もうけられている。こうした記念碑等の地図は同団体のウェブサイトを参照。“Whose Heritage? Public Symbols of the Confederacy,” Southern Poverty

Law Center, April 21, 2016. https://www.splcenter.org/20160421/whose-heritage-public-symbols-confederacy（2017 年 12 月 26 日閲覧。以下、言及のない限り、すべてのウェブサイトは同日確認。）

2 Francis Robles, “Roof’s Photos Appear on Site with Manifesto,” *New York Times*, June 21, 2015. これまで州議事堂に南軍旗を掲揚していたサウスカロライナ州議会は、事件の翌月南軍旗を議事堂に掲揚しないことを議決し、ウォルマートやアマゾンなどの小売業者も南軍旗の販売中止を宣言した。

3 Jacey Fortin, “The Statue at the Center of Charlottesville’s Storm,” *New York Times*, Aug. 13, 2017. https://www.nytimes.com/2017/08/13/us/charlottesville-rally-protest-statue.html

4 例えば、南部連合の記念碑を多数建立した団体、南部連合の娘たち（United Daughters of the Confederacy）は、事件後しばらく沈黙を守ったが、8 月 21 日に声明を発表して、白人至上主義者ら過激思想団体が南部連合のシンボルを悪用していると批判した上で、記念碑はアメリカの歴史の一部としてそのまま残されるべきだと主張した。“Statement from the President General,” Aug. 21, 2017, http://www.hqudc.org/ この団体の事件に対する対応については、以下を参照。Max Kutner, “As Confederate Statues Fall, the Group Behind Most of Them Stays Quiet,” Aug. 25, 2017, Newsweek, http://www.newsweek.com/united-daughters-confederacy-statues-monuments-udc-653103

5 ジャップ・ロード改名論争において、いかに「ローカル」と「ナショナル」というスケールが創造されたかについては、拙論「ジャップ・ロード改名論争におけるスケールの創造　－「ローカル」な記憶と「ナショナル」な記憶の再生産」村井忠政編著『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生：グローバル時代の日系人』（明石書店、2007 年）197-222 を参照。本稿は、筆者の博士論 文 “The Making of ‘Immigrants’ in the United States: Case Studies in Contemporary Japanese/Japanese American Communities”（東京大学、2011 年）の Chapter 2 および 3 の一部を日本語に翻訳し、大幅に加筆・修正したものである。

6 ファネットの人口は、2010 年国勢調査による。

7 Thomas Walls, *The Japanese Texans* (San Antonio: The University of Texas, Institute of Texas Cultures at San Antonio, 1987), 39-41.

8 間宮國夫『西原清東研究』高知市民図書館 , 1994 年 , 344-49, 表 X-8.

9 いくつかの資料では、真弓吉雄は貴族院議員として紹介されているが、実際に議員であったことはない。貴族院では、皇族・華族のほかにも、各県の多額納税者を議員の候補者としていた。明治後期、吉雄の父、屯之輔は三重県で 2 番目の多額納税者で、1889 年から 1925 年の間、父子は貴族院議員候補者であったが、選出されたことはなかった。渋谷隆一編『明治期日本全国資産家・地主資料集成 4 巻』柏書房、1984 年 ; 渋谷隆一編『大正昭和日本全国資産家・地主資料集成 1 巻、3 巻』柏書房、1985 年を参照。

10 「郷土の先覚、真弓吉雄」三重県人北米発展史編纂委員会『三重県人北米発展史』三重県海外協会 , 1966 年 , 292-99.

11 たとえばテキサス米作の先駆者で成功者として知られる西原清東は、家族を含め 30 名以上を組合員として渡米させた。間宮『西原清東研究』, 表 X-6。

12 起業家の一人、吉村大次郎はテキサスの米作についての著書を二冊刊行し、大西

理平、片山潜、西原清東らをはじめとする先駆者の論考が『渡米雑誌』『東洋経済新報』『実業之日本』『時事新報』などに掲載された。テキサス米作に関する外務省報告および関係雑誌記事一覧については、間宮『西原清東研究』, 314-18 を参照。

13 間宮 , 前掲書 , 319. 駒場というのは東京大学農学部などの前身である駒場農学校を指す。

14 Masakazu Iwata, *Planted in Good Soil: A History of the Issei in United States Agriculture*, vol. 2 (New York: Peter Lang, 1992), 719.

15 Walls, *Japanese Texans*, 39; Henry Dethloff, *A History of the American Rice Industry, 1685-1985* (College Station: Texas A&M University Press, 1988), 66; 松本紘宇『アメリカ大陸コメ物語』明石書店 , 2008 年 , 77.

16 "Fannett, TX," *Handbook of Texas Online*, Robert Wooster, http://www.tshaonline.org/handbook/online/articles/hlf05, uploaded on June 12, 2010, Texas State Historical Association.

17 Gwendolyn Wingate, "Saga of Yasuo Mayumi Stirs Fannett Memories," *Beaumont Enterprise* (以下 *BE*), Jan. 21, 1973; List or Manifest of Alien Passengers for the U.S. Immigration Officer at Port of Arrival at the Port of Seattle and Tacoma, 1904-1916, and Record of Entry into the US at the Port of San Francisco, 1908-1919, Hirasaki National Resource Center, Japanese National American Museum, Los Angeles.

18 Walls, *Japanese Texans*, 82.

19 三重県人北米発展史編纂委員会『三重県人北米発展史』, 95-98.

20 新日米新聞社『米国日系人百年史』新日米新聞社 , 1961 年 , 1235.

21 西原清東の生涯については、間宮『西原清東研究』を参照。

22 "Outline of Proposed $4,070,000 Road and Bridge Bond Issue," Texas Gulf Historical Society Collection (MS-77), Tyrrell Historical Library, Beaumont, TX (以下 THL).

23 Maxsane Mitchell, "Teacher Signs off on Insult," *BE*, Sept. 15, 1992.

24 Wingate, (title unknown), *BE*, Jan. 18, 1973.

25 Walls, *Japanese Texans*, 60-61.

26 Ibid., 141-42.

27 Wingate は 1973 年の記事に、"Mayumi" の発音を "Mayumi (pronounced My-me)" と記述しており、英語話者にとっては発音が困難なスペルだったと思われる。Wingate, "Saga of Yasuo Mayumi."

28 "Road's Name Is History," *BE*, June 27, 1993, Box 21, File 54, "Jap Road 1993," THL.

29 Judy Shoaf, "'Japs' in 19th-century popular usage," http://users.clas.ufl.edu/jshoaf/Jdolls/jdollwestern/jappy4.htm

30 Judy Shoaf, "Queer Dress and Biased Eyes: The Japanese Doll on the Western Toyshelf," *Journal of Popular Culture* 43, no. 1 (Feb. 2010), 177-95.

31 Dethloff, *A History of the American Rice Industry*, 91.

32 芦田鹿造「渡航案内」『実業之日本』8 巻 4 号（1905 年 2 月）, 24.　ただ、シアトルの日本人移民の懐古談にあるように、無知ゆえに差別の意図なく日本人を「ジャップ」と呼んだ親日的なアメリカ人もいたという。伊藤一男『北米百年桜』日米出版 , 1973 年 , 136-38.

33 佐伯彰一『日米関係の中の文学』文芸春秋 , 1984 年 , 205-31.
34 前田河広一郎『評論集十年間』大衆公論社 , 1930 年 , 108-14. 前田河の評論の分析は、佐伯『日米関係の中の文学』, 256-76 を参照。
35 三重県海外協会『会報』第 3 巻 (1929), 2-5, 日本力行会国際交流蔵書 .
36 『三重県人北米発展史』, 298.
37 サンドラ・タナマチ、筆者によるインタビュー , テキサス州ヒューストン市 , 2008 年 2 月 24 日 .
38 Walls, *Japanese Texans*, 106-18.
39 『米国日系人百年史』, 1231, 1261.
40 Walls, *Japanese Texans*, 110.
41 山代宏道監修『日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書』国際交流基金日米センター , 2007 年 , 41; Walls, *Japanese Texans*, 110-12, 172-73.
42 『日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書』, 42.
43 前掲書 , 42.
44 タナマチ , 筆者によるインタビュー .
45 *Metropolitan Beaumont*, March/Apr. 1991, 9. File: MS-08 Chamber of Commerce, THL.
46 *Metropolitan Beaumont*, Sept./Oct. 1991, 10. File: MS-08 Chamber of Commerce, THL.
47 Esther Wu, "Slur in Road Name Challenged," *Dallas Morning News*, July 14, 2004.
48 郡議員は County Commissioner、郡議会は County Commission、郡判事は County Judge の訳とする。
49 Mitchell, "Teacher Signs off on Insult," *BE*, Sept. 15, 1992.
50 Readers Write (以下 RW), "Is 'Tex' a Slur, too?" *BE*, June 19, 1993, Box 21, File 57& "Road's Name Is History," *BE*, June 27, 1993, Box 21, File 54, ともに "Jap Road 1993," THL（以下、特に言及のない限り、"Jap Road 1993," THL からの資料を THL と記す）.
51 RW, "Nakata Teaches Prejudice," *BE*, July 3, 1993, Box 21, File 57, THL.
52 最初の改名論争当時、タナマチはしばしば夫の姓ナカタを名乗っていた。本稿では混乱を避けるため、引用以外の部分では、彼女の姓をタナマチと記述する。
53 RW, "Where Is Our Pride?" *BE*, May 15, 1993, Box 21, File 54, THL.
54 RW, "What Is Road Good for?" *BE*, May 26, 1993, Box 21, File 57, THL.
55 RW, "Name Could Be Recognition," *BE*, July ? 1993, Box 21, File 57, THL.
56 RW, "A Road for Each of Us," *BE*, June 16, 1993, Box 21, File 54, THL.
57 RW, "Is 'Tex' an Insult?" Aug. 14, 1993 & "'Jap' Is Abbreviation," Aug. 27, 1993, ともに *BE*, Box 21, File 57, THL.
58 RW, "Just Call It Japan Road," July 5 & "Just Change the Name," Aug. 3 & "Let's Try This with Jap Road," July 9, 1993, 以上すべて *BE*, Box 21, File 57, THL.
59 RW, "Term Is Insulting," *BE*, Nov. 26, 1992, Box 21, File 54, THL.
60 Sandra T. Nakata, "Road Does Not Honor Japanese Americans," *BE*, May 21, 1993, Box 21, File 54, THL.
61 RW, "We Fought for All Opinions," *BE*, June 10, 1993, Box 21, File 57, THL.
62 RW, "Slurs Hurt Everyone," *BE*, July 4, 1993, Box 21, File 57, THL.
63 RW, "Why Not Insult Everybody?" *BE*, June 1, 1993, Box 21, File 54, THL.

64 RW, “The Past Is the Past,” *BE*, June 16, 1993, Box 21, File 54, THL.
65 RW, “Compromise Can Be Found,” July 25, 1993, *BE*, Box 21, File 57, THL.
66 Editorial, “Jap Road Should Get a New Name,” *BE*, June 1, 1993.
67 タナマチ , 筆者によるインタビュー .
68 Gwen Muranaka, “A Sign of the Times…in a Texas Town,” *Pacific Citizen* (以下 *PC*), Jan. 22, 1993.
69 Sandra Tanamachi Nakata, “Needed, and Still Needs Help to Fight Racism in Texas,” *PC*, June 11, 1993.
70 Muranaka, “Tough Battle in Texas Towns,” *PC*, May 21, 1993.
71 Tanamachi, “Needed” & Muranaka, “Nikkei Lose 1st Battle but Vow to Change ‘Jap Road,’” June 25, 1993 & Betty Waki, “Jap Road and the Help That Didn’t Come,” Nov. 26-Dec. 16, 1993 すべて *PC*.
72 Letter, “Reader Says too Much Made of ‘Jap Road’ Issue,” *PC*, July 2-8, 1993.
73 Letter, “Let’s Get over Emotion of Word ‘Jap,’” *PC*, Jan. 21-27, 1994.
74 Letter, “No Matter Where, Racism Must Be Fought, Reader Says,” Aug. 6-19, 1993 & “Don’t Dismiss Those Who Fight ‘Jap Road’ Situation,” Feb. 4-10, 1994, ともに *PC*.
75 Letter, “The Importance of Fighting ‘Jap Road,’” *PC*, Feb. 4-10, 1994.
76 Muranaka, “Tough Battle.”
77 タナマチの強力な支援者であったワキは 75 マイルも離れたヒューストンに住んでいた。
78 David Bauerlein, “Fannett Road Name Change Gains Support,” *BE*, May 1993, Box 21, File 54, THL.
79 Copy of the announcement for public hearing to discuss the renaming of Jap Road, Box 21, File 53, THL.
80 Letter from Keep Jap Road Committee to Sandra Nakata, June 10, 1993, Box 21, File 53, THL.
81 Ibid.
82 Bauerlein, “Name Change Debate Travels Road to Nowhere,” *BE*, June 15, 1993, Box 21, File 54, THL.
83 Ibid.
84 Ibid.; Muranaka, “Jap Road Issue Heats Up,” *PC*, June 18, 1993.
85 Muranaka, “Issue heats up.”
86 Bauerlein, “Jap Road: Is It a Slur?” *BE*, June 21, 1993, Box 21, File 54, THL.
87 Bauerlein, “Teacher Cancels Jap Road Meeting,” *BE*, June 23, 1993, Box 21, File 54, THL.
88 Muranaka, “Texas Nikkei Gets Support in Jap Road Fight,” *PC*, July 23-Aug.5, 1993.
89 ADL は反ユダヤ主義に対抗するために 1913 年に設立された、ユダヤ系アメリカ人を中心とする国際非政府団体である。LULAC は 1929 年に設立された、ラテン系アメリカ人の公民権団体である。TCLU は、1920 年に設立されたアメリカ自由人権協会（American Civil Liberties Union, ACLU）のテキサス支部である。
90 James C. Ho, et al., “Panel Discussion: The Struggle to Change ‘Jap Road,’” *Asian American Law Journal* 13 (2006): 145-63.

91 Muranaka, “Texas Nikkei Gets Support.”
92 Bauerlein, “Name Change Debate Travels,” *BE*, June 15, 1993, Box 21, File 54 & Doris Quan, “Called into Question: Dispute over Jap Road Festers in Jefferson County,” *Dallas Morning News*, June 27, 1993, Box 21, File 55, ともに THL; Lianne Hart, “Battle to Rename Texas Town’s Road Turns into War of Words,” *Los Angeles Times*, Dec. 3, 1993.
93 Gwendolyn Wingate, “The Story behind the Headlines,” *PC*, Dec. 17, 1993-Jan. 6, 1994. これは 1970 年初頭のエンタープライズ紙の記事を再掲載したものである。
94 Muranaka, “Texas Nikkei Gets Support.”
95 サンドラ・タナマチから筆者へのｅメール , 2008 年 1 月 28 日 ; “Twelve Year Quest to Change the Name of ‘JAP Road,’” http://www.javadc.org/twelve_year_quest_to_change_the_.htm
96 NAACP は 1909 年に設立された全米初の公民権団体である。
97 Copy of the letter from Tom Rugg, First Assistant of Criminal District Attorney Jefferson County to Carl R. Griffith, Jr., Jefferson County Judge, five County Commissioners, Aug. 27, 2003, Wayne Wright 氏所蔵 .
98 OCA は 1973 年に設立されたアジア系の公民権団体で、ADL や NAACP、JACL とも連携している。http://www.ocapghpa.org/about/index.html
99 Ho, et al., “Panel Discussion.”
100 Dee Dixon, “Political Crossroads,” *BE*, Dec. 2, 2003.
101 Reuters, “Groups Sue to Change Name of ‘Jap Road,’” CNN.com, http://edition.cnn.com/2003/US/Southwest/12/03/name.road.reut/; 福島申二「「ジャップ通り」名称変えて 「侮蔑的」日系人ら要望　米テキサス」『朝日新聞』2003 年 12 月 7 日 .
102 Dixon, “Making Their Gripe Official,” Dec. 3, 2003; Dixon, “Name Controversy Nears the End of the Road - Residents Willing to Alter Name of Jap Road,” Dec. 16, 2003, ともに *BE*.
103 “Road Name Change Should Occur Sooner,” *BE*, Jan. 11, 2004.
104 Simon Romero, “Texas Community in Grip of a Kind of Road Rage,” *New York Times*, July 16, 2004.
105 Thom Marshall, “Jefferson County Decides to Rename Jap Road,” *Houston Chronicle*, July 20, 2004.
106 Kris Axtman, “In an East Texas Town, the Fight is All in a Name,” *Christian Science Monitor*, July 29, 2004.
107 RW, “Changing Road’s ‘Offensive’ Name Would Be Positive Move,” Dec. 10, 2003; RW, “Inappropriate Names of Roads Must Change,” June 13, 2004, ともに *BE*.
108 RW, “Jap Road Critic Needs to Recall War Atrocities,” June 13, 2004; RW, “Road’s Name Simple Contraction, Not Racial-motivated Slur,” Jan. 14, 2004, ともに *BE*.
109 RW, “Those Perpetually Offended Have Their Own Cottage Industry,” Jan. 10, 2004; RW, “Many People Involved in Road Dispute Just Like to Complain,” Jan. 15, 2004, ともに *BE*.
110 Marshall, “Jap Road Finally Comes to End.”
111 Beth Gallaspy, “Two Sides of Jap Road,” *BE*, July 15, 2004.
112 RW, “Paper Provides Aid, Comfort Regarding Jap Road Issue,” *BE*, Jan. 22, 2004;

Romero, “Texas Community.”

113 Pam Easton, “Jap Road Hearing Set for Monday,” *Associated Press*, July 18, 2004.

114 RW, “Let’s Hope Jap Road Issue is Viewed through Forgiving Lens,” *BE*, June 10, 2004.

115 Caroline Aoyagi, “Efforts to Rename ‘Jap Road’ and ‘Jap Lane’ in Texas Still an Ongoing Struggle,” Apr. 2-5, 2004 & “Texas Commissioners to Take up ‘Jap Road’ Issue,” July 16-Aug. 5, 2004, ともに *PC*.

116 “Readers Respond to ‘Jap Road’ and ‘Jap Lane,’” May 7-20, 2004; “WWII Veterans Support Name Changes in Texas,” June 18-July 1, 2004, ともに *PC*.

117 実際、2004 年当時カリフォルニア州バークレーに住んでいた筆者が改名論争を知ったのも、サンフランシスコベイエリアの日系アメリカ人グループの電子メールのリストサーヴを通してであった。

118 タナマチ , 筆者によるインタビュー .

119 ヘンリー・タカタ（仮名）, 筆者によるインタビュー , 2008 年 2 月 25 日 , ヒューストンにて .

120 Japanese American Citizens League, Houston Chapter, “Family Stories,” http://hirasaki.net/Family_Stories/Family_Stories.htm.

121 リンダ・真弓・クリッカー , 筆者によるインタビュー , 2008 年 3 月 9 日 , ロサンゼルスにて .

122 Romero, “Texas Community.”

123 Dan Wallach, “One Grower Struggles with International, Local Political Woes,” *BE*, July 24, 2004.

124『米国日系人百年史』1241；松本『コメ物語』271-72.

125 Wallach, “One Grower Struggles.”

126 Dixon, “Opinions Changed Depending on What Side of Room You Were on,” *BE*, July 20, 2004.

127 Gallaspy, “End of Jap Road,” *BE*, July 20, 2004.

128 Marshall, “Jefferson County Decides.”

129 Gallaspy, “What Will It Be?” *BE*, July 21, 2004.

130 Eric Hanson, “Second Jap Road Quietly Renamed,” *Houston Chronicle*, Sept. 29, 2004.

131 “Jap Rock Receives New Name,” *PC*, Nov. 19-Dec. 16, 2004.

132 Jamie Reid, “Lane’s Change,” *BE*, July 6, 2005.

133 “JACL Announces Edison Uno and JA of the Biennium Awards,” *PC*, May 5-18, 2006; Roland Garcia, “Slur Was Right There in the Open,” *BE*, May 25, 2006.

134 Jacqueline Lane, “Teacher Awarded Japanese Foreign Minister Award,” *BE*, July 4, 2006;「平成 18 年度外務大臣表彰授与式での祝辞：受賞者サンドラ・タナマチ女史」在ヒューストン日本国総領事館 , 2006 年 9 月 21 日 , http://www.houston.us.emb-japan.go.jp/page20060921.htm

135 元ジャップ・ロード住民 A, 筆者によるインタビュー , 2008 年 2 月 23 日 , ファネットにて .

136 Lawrence Berg and Robin Kearns, “Naming as Norming: ‘Race,’ Gender, and the Identity Politics of Naming Places in Aotearoa/New Zealand,” *Environment and Planning D: Society and Space* 14, no. 1 (1996): 99-122, 99.

137 南川文里『アメリカ多文化社会論「多からなる一」の系譜と現在』法律文化社 , 2016 年 , 118-29.

138 Nathan Glazer, *We Are All Multiculturalists Now* (Cambridge: Harvard University Press, 1997), 14, 南川『アメリカ多文化社会論』136-37 より引用。

139 哲学者のローレンス・ブラムは、近年のアメリカ社会において「人種差別主義（racism）」や「人種差別主義者（racist）」という言葉が、様々な事柄に対して過剰に使われていると指摘し、こうした傾向によって真のレイシズムが見えにくくなってしまうと警告し、真のレイシズムとは何かを理解する必要があると述べている。Lawrence Blum, "*I'm not a Racist, but…*": *the Moral Quandary of Race* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2002).

140 元ジャップ・ロード住民 B, 筆者によるインタビュー , 2008 年 2 月 23 日 , ファネットにて.